布おむつの洗濯・管理に対する母親の態度と課題

植竹　桃子　　正地　里江

紙おむつが抱える問題点・課題に対応するものとして不可欠な「布おむつ」に焦点をしぼり，その洗濯･管理に関する事項を中心に，育児中の母親（7 名）に対して面接法による実態調査を行った。日常の一般的な衣服に対する家庭洗濯は，子供のために手間を惜しまずに実践される傾向にあり，乾燥は一般家庭と同様に屋外干しが中心であった。使用しているおむつは，全員が紙おむつであるが，その知識・情報を得ること，手部装着実験を行うことで，紙おむつのつけ心地の悪さを認識し，使用法への配慮が自覚され，さらに布おむつに対する関心が生じた。しかし，布おむつの使用に対しては，洗濯の手間が，使用に踏み切る際の障害であった。したがって，紙おむつ・布おむつに対する正しい知識・情報の提供，つけ心地の模擬的実体験を行うこと，さらに，布の貸おむつを身近に利用しやすくすることが，個々に応じ且つ地球環境を配慮したおむつの使用につながると考える。

キーワード : 布おむつ，洗濯，乾燥，貸おむつ，手部装着実験

1．緒言

おむつは，使用に際する身につけ方（汚れがおむつから漏れないように開口部を完全に閉じて身につける）と汚れの質が一般的な衣服と著しく異なり，これに伴って，つけ心地に問題が生じやすい。また，おむつの使用対象者は，乳幼児と，排泄の自立が困難な状況にある者であり，すなわち，おむつの着脱の世話を行う立場の者は，一般的にはおむつ使用者ではない点も大きな特徴である。したがって，わが国の高齢化現象と核家族内での育児，という現状から考えると，おむつの取り扱い・使用に際しては，正しい情報・知識を有することが必要となる。

おむつの種類は，素材の点から「布おむつ」と「紙おむつ」に大別できるが，現代では紙おむつが多く使用されている。布おむつから紙おむつへの転換率は，2003 年実績で，乳幼児用では 92.1％，大人用では 69.0％であり，大人用の転換率は今後一層上昇すると推測されている [1)]。おむつの使用は“紙おむつ主流”が現実であり，紙おむつ製品の宣伝・広告では，吸水性・通気性がよく，“紙おむつはとてもつけ心地がよいもの”というイメージが先行しているのも現実である。

しかし，これまでの数々の研究によって，紙おむつは必ずしも快適とはいえず，交換時間等の使用法に留意する必要のあることが示されている [2) 3) 4)]。また，循環型社会の構築の観点からは，使用済み紙おむつの処理，リサイクルという課題が生じ，有用性のある対応が必要とされている。すなわち，おむつを扱う立場の者（母親，保育者，看護者，介護者等）一人一人が，おむつに対して問題意識を有しながら使用することが望まれる。

著者らは，これらの点を教育の現場で効果的に理解させることの必要性が極めて高いと考え，著者らが携わっている生活系学生を対象とした教育のしかたについて研究してきた。すなわち，つけ心地を模擬体験して理解できる「手部装着実験」の望ましい実験条件を，紙おむつ・布おむつについて検討し [5) 6)]，さらに，実装着実験をしなければ理解できないつけ心地について報告した [7)]。

これらの結果を活かしながら，学生に限定せずより多くの人々に，紙おむつ・布おむつに対す

短期大学生活科学科

る理解を広めるためには，著者ら自身が，おむつ使用の現場での実態や，おむつの着脱の世話を行う者の率直な気持ちをつかむこと等が必要と考えた。そこで本研究では，紙おむつが抱える問題点・課題に対応するものとして不可欠な「布おむつ」に焦点を絞り，布おむつ使用において大きな課題と考えられる洗濯・管理に関する事項を中心に，実態調査を行うこととした。調査対象は，専門的な情報が少ないことが推測される，育児中の一般家庭の母親とした。

2．研究方法

2－1　調査対象および調査方法

調査対象は，東京近郊（神奈川県，千葉県）に居住して，おむつを使用中の乳幼児を育てている母親7名（満22歳～36歳，平均30.9歳）である。表1に，被調査者A～G(以下A～Gとする)の基本属性を示す。Aのみが3世代同居で，B～Gは夫婦と子供の核家族である。また，おむつ使用中の子供は，D，Gが第2子で，他の5名は第1子である。

調査法は面接法とし，平成18年8月～9月に調査員1名が被調査者の自宅に出向き（GおよびDは，被調査者の都合により，それぞれGの実家にて実施），面接票に従って進める指示面接を実施した。なお，指示面接を進める中では，新しい問題や課題を発見する可能性がある自由面接[8]（自由歓談）も随時取り入れた。

2－2　調査内容

調査は，次に示す順序で，調査者からの質問に回答してもらう形式で進めた。

1）質問Ⅰ：①家事全般に対する態度，②家庭洗濯のしかた，③洗濯物の乾燥法，④使用おむつの現状。なお，輪型の布おむつを干すためのパラソルハンガー，おむつハンガーを持参して，洗濯物干し場での使用の可否も確認した。

2）知識・情報の提供と実体験：①紙おむつについての知識（組成，基本的性能，おむつ内気候）を文書（A4版1枚）で提示，②紙おむつの手部装着実験：紙おむつに約37℃のぬるま湯100ccを注水した後，手部に5分間の模擬装着を行い，模擬装着中のこれに対する官能評価を実施，③布おむつ・おむつカバー（実物）の自由観察，④布おむつの使用に関する情報（布おむつの洗濯のしかた，「布の貸おむつ」の利用のしかた）を文書（A4版1枚）で提示。

3）質問Ⅱ：紙おむつ・布おむつに対する考え・態度。

以上の面接調査に要した時間は，被調査者1人あたり約90分間である。

表1.　被調査者の基本属性

被調査者	満年齢（歳）	居住地	おむつ使用の子	同居家族	就労	住居の形態	住居の間取り
A	22	神奈川県横浜市	男・第1子・17ヶ月	本人・夫・第1子・実父・実母・実妹	なし	一戸建て	4LK
B	26	神奈川県川崎市	女・第1子・5ヶ月	本人・夫・第1子	なし	5階建マンション5階部分	3DK
C	29	千葉県柏市	女・第1子・13ヶ月	本人・夫・第1子	なし	2階建アパート1階部分	2DK
D	33	神奈川県藤沢市	女・第2子・24ヶ月	本人・夫・第2子・第1子（満5歳）	なし	一戸建て	4LDK
E	34	神奈川県川崎市	女・第1子・6ヶ月	本人・夫・第1子	なし	一戸建て	4LDK
F	36	神奈川県川崎市	女・第1子・6ヶ月	本人・夫・第1子	なし	7階建マンション3階部分	3LDK
G	36	神奈川県藤沢市	男・第2子・18ヶ月	本人・夫・第2子・第1子（満4歳）	委託販売職	2階建アパート2階部分	3DK

表2.　家事全般に対する態度

被調査者	料理*	縫い物*	掃除・片付け*	手助け	育児	
					嗜好度*	日頃感じていること
A	好き	好き	きらい	実母（休日）	好き	子供の成長・可愛さ
B	好き	好き	どちらでもない	夫（休日）	好き	成長は早い
C	好き	きらい	好き	夫（休日）	好き	日々の成長
D	どちらでもない	好き	好き	夫（休日）	好き	体力がない、人を育てるのは大変
E	どちらでもない	好き	きらい	夫（休日）	どちらでもない	可愛い、一日が長い、社会とつながっていない
F	好き	好き	好き	夫（休日）	好き	自分のペースではない、成長がうれしい
G	きらい	どちらでもない	好き	夫（休日）	好き	やるしかない

＊　選択回答:好き・どちらでもない・きらい

3．結　果

3－1　家事全般に対する態度（表2）

全員に共通な点は，毎日の家事は自分が行い，手助けは休日に家族によりなされる点である。A，B，C，Fは，家事の多くを「好き」と回答している上，調査者にも家事を楽しんでいる様子が伝わってきた。しかし，D，E，Gは，育児に対して大変さ・義務感を訴えており，調査者にも家事を楽しんでいる様子は感じられず，むしろ大変そうな様子が印象的であった。D，Gは第2子であること，またGは有職である点が一因ではないかと，推測される。

3－2　家庭洗濯のしかた（表3）

全員が全自動洗濯機を用いて，ほぼ毎日洗濯を行っており，A以外は，つけ置洗い・下洗いと漂白も行っている。つけ置洗い・下洗いは，主に子供により付着した汚れに対して行い，仕分け，漂白は家庭によって異なるが，約半数が子供用品に対して行っている。柔軟仕上剤の使用状況も家庭によって異なるが，B，Cはあえて子供用品への使用を行わない点が注目される。

総じて，つけ置洗い・下洗い，仕分け，漂白という家庭洗濯に対する手間は，子供用品を中心に対して行っている傾向が認められた。

表3.　家庭洗濯のしかた

被調査者	洗濯の頻度*	洗濯機	つけ置洗い・下洗い**	仕分け***	漂白****	柔軟仕上剤****
A	毎日	全自動	行わない	作業着 弱水流用品	行わない	毎日使用 全ての物
B	1日おき	全自動	行う ワイシャツの衿	子供用品 靴下等	時々行う しみがあれば	しばしば使用 子供用品は除く
C	毎日	全自動	時々行う 子供の便等	全て一緒	時々行う 夫の制服	使用しない 子供がかぶれた
D	毎日	全自動	時々行う 子供の泥汚れ	全て一緒	時々行う 食べこぼし等	使用しない
E	毎日	全自動	時々行う 子供の便等	大人用品と 子供用品	しばしば行う 大人用品	時々使用 全般品
F	毎日	全自動	時々行う 子供用品	大人用品と 子供用品	時々行う ミルクじみ・布巾	毎日使用
G	毎日	全自動	行う 食べこぼし等	全て一緒	しばしば行う 子供用品・タオル	使用しない

＊　選択回答:　毎日・1日おき・2日おき・その他
＊＊　選択回答:　する・時々する・しない
＊＊＊　選択回答:　全て一緒・分ける
＊＊＊＊　選択回答:　しばしば行う・時々行う・行わない

表4.　洗濯物の乾燥法

被調査者	乾燥機器・設備		屋外				屋内		
	乾燥機	浴室乾燥	場所	さお・干し器	パラソル型＊	平行型**	場所	パラソル型＊	平行型**
A	なし	なし	なし（木に虫がでるため）（以前は戸外）		（可）	（可）	リビング部屋の境	可	可
B	洗濯機一体型 年1回程度	あり	ベランダ	さお2本（高さ100cm）角型ハンガー1～2個	可	可	リビング浴室乾燥	可	可
C	あり 使用しない	なし	ベランダ	さお2本（高さ210cm）角型ハンガー1個（建物側）	不可	可	リビング（8畳）ハンガー使用	不可	不可
D	なし	なし	ベランダ	さお2本	可	可	窓際（折りたたみ式の物設置）	可	可
E	なし	なし	ベランダ	さお2本（高さ190cm）角型ハンガー2個	可	可	2階の1室（6畳）ハンガー・はしご	可	可
F	なし	あり 梅雨・大物	ベランダ	さお1本（高さ140cm）角型ハンガー2個	可	可	浴室	可	可
G	なし	なし	ベランダ	―	可	可	各室・ドアの上 さおを渡す	可	可

＊　パラソルハンガー：アームの長さ36cm,アームの本数20本,全体の直径84cm
＊＊　おむつハンガー　：アームの長さ32cm,アームの本数20本,全体の大きさ39cm×71cm

3－3　洗濯物の乾燥法（表4）

乾燥機或いは浴室乾燥設備を所有しているのは7名中3名（B，C，F）であるが，3名とも毎日使用している訳ではなく，使用は梅雨時や大物を乾かす時に限られていることが注目される。これは，天候（気象条件）により屋外で乾かない時に屋内に干す，という一般家庭の傾向[9]と合致しており，育児中の家庭が洗濯物の乾燥法に対して特別な手法を施している訳ではない，という傾向が認められる。

屋外の干し場についてみると，Cのベランダは極めて奥行きが狭いために洗濯物を干せる量が少なく，パラソルハンガー（パラソル型のおむつ干し）は直径が大きすぎ，使用が不可能であった。屋内の干し場についてみると，E，F以外は日常生活スペースに干している。これは，室内に干せる洗濯物の量が限られること，さらに，洗濯物を邪魔或いは見苦しいと感じることにつながる，と推測される。

総じて，乾燥機器・設備の所有率・使用率は低

表5.　使用おむつの現状

被調査者	おむつの種類			現在の理由	交換のタイミング	費用（1ヶ月）	感じていること
	病院	退院後	現在				
A	布	紙	紙	洗うことが嫌、便利。母は布を勧める。	気づいた時 臭った時	約4000円	特にない。
B	布	布（1ヶ月）	紙	母親に勧められた。両方使ってみたかった。	お知らせサイン	3000～4000円	安くなった。ゴミが出る。
C	紙	紙	紙	当然。何とも思わない。	食事後 排泄の有無確認	約3000円	便利、高い。夏は蒸れる。
D	紙	紙	紙	自分の負担を減らす。援助者がいない。	膨れ具合 知らせたら	約1500円	通気性をよくしてほしい。
E	紙	紙	紙	自分が楽をしたい。母も紙使用を認めた。	2～3時間毎 ミルクの時間	約4000円	高い。
F	紙	紙	紙	当然。	授乳時 排泄の気配時	2500～3000円	排泄が少量時にはもったいない。
G	布	紙	紙	第1子は生後1年間は布。母が布を購入してきた。	排泄の有無確認	約5000円	排泄少量時にはもったいない。布は不可。

く，屋外干しと，家庭ごとに工夫をしながらの屋内干しが行われているのが実状である，といえる。

3－4　使用おむつの現状（表5）

出産直後に病院で使用したおむつが，布おむつだったのは3名であるが，現在は全員が紙おむつを使用している。その理由は，A，C，Fは「紙おむつで当然」と考えており，D，Eは「自分の負担軽減」である。紙おむつの交換は，全員が排泄に応じて行っている。紙おむつの使用に対して感じていることは，値段（3名），ゴミ・もったいなさ（3名），通気性（2名）が挙げられており，A以外は何らかの問題点を感じながら使用していることが明らかとなった。

3－5　手部装着実験（表6）

紙おむつについての知識（組成，基本的性能，おむつ内気候）を文書で提示した後に行った，手部装着実験（湿潤状態の紙おむつを手部に密閉して5分間装着）の結果を，表6に示す。

官能評価についてみると，概ね，肌ざわりは「悪い」，快適感は「不快」，温冷感は「あつい」，湿潤感は「湿っている」と評価している。手部装着実験を行ったことで，装着時は好ましくない状態であることが認識された，と判断できる。

その結果，実験後の感想として，紙おむつの蒸れ・湿気を「予想以上」「ひどい」と評し，紙おむつを使用することを子供に対して「可哀想」（4名）と感じ，紙おむつの頻繁な交換を希望（4名）している。すなわち，前述の「使用おむつの現状（表5）」で，紙おむつの「通気性」を指摘したのは2名のみであったのに対し，紙おむつの知識を得た後に手部装着実験を行うと，紙おむつの使用に対する捉え方が明らかに変化したことになる。同時に，布おむつに対する興味が生じる（A，D，E）一方，実際に布おむつを使用することに踏み切るまでには至らない傾向が認められる。

3－6　布おむつに対する態度（表7）

表7に，前述の手部装着実験後における布おむつに対する態度を示す。

子供にとってのつけ心地は，全員が紙おむつよりも布おむつの方が良いであろう，と推測している。前述した紙おむつの手部装着実験の影響によるものと考えられる。

しかし，G以外は，布おむつの洗濯を「大変そう」と捉え，自身が洗濯を実施することに対して「できる」の回答は2名のみで，4名ははっきりと「で

表6.　手部装着実験の結果

被調査者	官能評価				実験後の感想	
	肌ざわり*	快適感**	温冷感***	湿潤感****	紙おむつに対して	布おむつに対して
A	悪い	不快	あつい	湿っている	あつくて可哀想だが布は無理。今後も紙を使用したい。	貸おむつは高いが、使うのもよいかもしれない。
B	悪い	不快	あつい	湿っている	予想以上の湿気。不快だった。	特にない。
C	悪い	不快	あつい	湿っている	可哀想なので、こまめに換えてあげたい。早くおむつが取れるように。	かさばり、がに股になるｲﾒｰｼﾞがあり、想像と異なる。
D	どちらでもない	不快	どちらでもない	湿っている	湿気がひどい、こまめに換えてあげたい。	良いとは思うが、洗濯・除菌を考えると紙になる。
E	悪い	不快	あつい	湿っている	こんなに蒸れて可哀想、もっと涼しいイメージがあった。	興味はあるが、使い続ける事・乾燥に不安。
F	悪い	不快	どちらでもない	湿っている	可哀想だが洗濯を考えると、ごめんね、と思いつつ頻繁に換えてあげたい。	使う気はない。洗濯が楽なら良いのに。
G	悪い	不快	あつい	湿っている	こんなに蒸れていることを実感、ぬれたら早く換えてあげたい。	自分が体験していない為に良さを知らなかった。

＊　選択回答：良い・どちらでもない・悪い
＊＊　選択回答：快適・どちらでもない・不快
＊＊＊　選択回答：あつい・どちらでもない・冷たい
＊＊＊＊　選択回答：乾いている・どちらでもない・湿っている

表7.　布おむつに対する態度

被調査者	子供にとっての つけ心地	洗　濯		洗　濯	乾　燥	手　間	時間的余裕
		印象*	実施**				
A	布の方がもちろん良い。	大変そう	できない	疲れる。	干すことは構わない。	大変だろう。	時間がない訳ではない。
B	布は柔かくて良い。	大変そう	できる	大変だと思う。	場所があれば構わない。	かかる。	4～5ヶ月頃ならできるかも。
C	紙の蒸れを考えたら布の方が良いのではないか。	大変そう	できない	大変だろう。	干す場所がない。	かかる、経済的に良い。	子供が小さい時ならあった。
D	きっと良いと思う。	大変そう	できない	何回洗濯機を回すのだろう。	雨天時に困る。	洗濯・折りたたむ手間。	忙しいのではない。
E	布の方が良いのだろうか。	大変そう	できない	面倒、大変な気がする。	乾燥機でも良いのか。	かかりすぎる。	ない
F	恐らく良いのであろう。	大変そう	どちらでもない	大変そう。	日干しだと気持ちよいだろう。	増えると思う。	ない
G	布は良さそうだ。	大変ではない	できる	できたら省きたい。	湿度があがる。干し場がない。	かかる。	ない

＊　選択回答:大変そう・どちらでもない・大変ではない
＊＊　選択回答:自分にもできる・どちらでもない・自分にはできない

きない」と答えている。この4名のうち2名（D，E）は，3－1で述べたように，面接時に調査者が受けた印象が，「家事を楽しむのではなく大変そうな様子であった」というものである。現実的に布おむつを母親自身が使用し洗濯を実行することを，重荷に捉えていることがわかる。洗濯後の乾燥については，洗濯ほど重荷に捉えているわけではなく，干す場所（3名），乾燥の手段（2名），雨天時の対応（1名）への懸念が生じるにとどまる。手間については全員が「かかる」，と考えている。乾燥機器を有しているB，Cが干し場所を懸念している点が注目される。

一方，時間的余裕については，はっきりと「ない」と回答したのは3名のみで，子供の月齢が低い時の方が余裕がある（2名），或いは時間がないわけではない（2名），と述べている。

したがって，布おむつに対しては，「おむつの装着感」からの判断，母親自身が洗濯を行う手間からの判断，時間的余裕からの判断，の3点は一致せず，洗濯をすることの負担感が障害となり，最終的には子供にとってのつけ心地よりも母親側の使い勝手を優先させながら，使用に対する態度が成立している，と解釈できる。

3－7　自由歓談（表8）

表8に，面接調査中の随所で生じた自由歓談の内容をまとめて示す。

祖母（被調査者の母親）のおむつに関する態度としては，大方（7名中5名）が布おむつの使用を前提としており，紙おむつ志向の母親（被調査者）とのギャップが認められる。Cは，布おむつを使用させようとする祖母に対して，疑問さえ生じている。また，出産前の母親学級や出産をした病院において，おむつに関する知識・情報の提供が殆どなされていない点が注目される。これでは，母親がおむつに対する問題意識をもちにくくても無理はないであろう。

布おむつに対して，布おむつの使用経験があるB，G以外は，本調査を行うまで布おむつの存在或いは使用法・洗濯法等を知らずにいたことがわかる。被調査者は本調査により，それらの知識が不足していたことを認識し，布おむつへの疑問や興味が湧いてきており，特にA，Gは，貸おむつの利用にまで興味を示している点が注目される。

総じて，祖母から布おむつを使用することを勧められるが，おむつに対する具体的な知識・情報が不足したまま出産後の生活に入り，布おむつを実際に使用するまでには踏み切れず，便利な紙お

表８．　自由歓談のまとめ

被調査者	祖母（子供の母親の母親）の態度	病院・母親学級での体験	その他布おむつについて
A	布を勧める	おむつカバーは毛が良い、と言われたが、つけ方は教わらなかった	洗濯法・貸おむつを知らなかった。布を使用していたら祖母が洗ったと思う。
B	布を勧めた（1ヶ月使用後、体力的に大変な為、紙に変更し、楽になった）	—	布は頻繁にもれ、干す事も煩わしかった。布と紙の併用が良いと思う。
C	「縫ってあげる」「あなたのがある」と言ったが、自分は「誰が洗うのか?」と思った	布の話はない	布おむつを知らなかった。布はぬれてもサインが出ない。濡れ感が嫌ではないか。
D	義母が布を送ってきた	—	必要枚数がわからない。外出するのもこわい。
E	—	布の話はない	洗濯法を知って大変さのイメージが変わった。（布の良さが少しわかってきた様子）
F	「紙でしょ」と言った	—	価格・必要枚数がわからない。濡れたら早く教えるだろう。
G	布を購入してきた	—	第1子での布の経験は楽しく、回数が確実にわかった。貸おむつが良いかもしれない。

むつを使用する，というのが実態だと判断される。

４．考　察

一般的に，家事の中では「洗濯」は好きな家事，と捉えられており[10) 11)]，本調査においても，家庭における洗濯はほぼ毎日行い，つけ置洗い・下洗い，仕分け，漂白という手間を，子供用品を中心にして行う傾向にあった。つまり，日常の一般的な衣服に対する家庭洗濯は，子供のために手間を惜しまずに，より望ましい洗濯が実践されている傾向が認められる。

しかし，家庭洗濯の対象が「布おむつ」となると，母親の態度に変化が生じることが浮き彫りになった。本調査において，使用中のおむつは全員が紙おむつであり，その理由は，「自分の負担を減らすため」「当然」，というものである。紙おむつに対して何らかの問題点を感じながらも，高価という程ではなく入手しやすい紙おむつの便利さが魅力となり，使用されているのである。

このような，おむつに対する母親の態度に変化をもたらすのが，本調査時に行った「手部装着実験」だといえよう。予想以上の蒸れ，あつさ，不快感に驚き，紙おむつ使用時には頻繁な交換が必要であることが認識され，同時に，若干ながらも布おむつへの興味が湧き，そのつけ心地の良さが推測されるのである。したがって，育児中の家庭では，母親に限らず一家で「手部装着実験」を行うことで，おむつ着脱の世話に際して，つけ心地を認識したより望ましい使用法がなされる，と考えられる。

ところが，実際に布おむつを使用することに対する態度は，あくまでも洗濯の大変さ，自信のなさが前面に押し出されてくる。洗濯物の乾燥を，乾燥機器ではなく屋外干しに依存し，屋内干しの場合には日常生活スペースを使用しているにも関わらず，布おむつの乾燥に対する懸念よりも，一様に，洗濯することへの大変さ，否定感が現れているのである。

ここで注目されるのが，おむつに関する情報の少なさである。７名中５名の祖母は，布おむつの使用を前提としていたのに対して，出産前の母親学級や出産した病院において，おむつに関する知識・情報の提供が殆どない傾向にあるのが現状のようである。布おむつの使用に対する時間的余裕について，２名は，「月齢が低い時期であればあった」と回答し，また他の２名は「時間がないわけではない」と回答していることから，もし出産前或いは直後に，布おむつ・紙おむつそれぞれの特徴，つけ心地，洗濯・管理法，価格等の，具体的かつ正しい知識・情報が提示されていれば，その後の育児中のおむつに対する意識や選択が異なるのではないかと推測される。

また，この面接調査を行ったことで，２名（A，G）が布の「貸おむつ」への関心を示すようになっ

たことが注目される。母親が「大変だ」と思う布おむつの洗濯をせずに，子供のつけ心地と地球環境への配慮が実践できる貸おむつは，注目に値するもので，今こそ脚光を浴びるべきおむつではないかと考えられる。しかし，現状は，一般家庭を対象とした貸おむつ業者は極めて少なくなっている。乳幼児用貸おむつの生産量（洗濯，仕上げ，包装等の総量）についてみると，1 事業所当りの月間平均生産量は，平成 17 年度は 11 年度の約 61％に減少しており，紙おむつ業者との競争激化，生産量・売上げの減少が現在の課題・将来の課題となっている[12) 13)]。

以上より，育児中の母親は，おむつに関する客観的な知識・情報が欠如したまま紙おむつを使用している状況にあり，母親学級･病院等での知識･情報の提供，或いは手部装着実験によるおむつのつけ心地の実体験が必要と考える。これにより，個々の家庭環境，家事能力等に応じたおむつの選択・使用が実践できると推測する。そして望まれるのは，地球環境保護，循環型社会の構築の点から，布おむつの良さを見直すこと，さらに敬遠されている布おむつの洗濯・管理の手間への理解・工夫や，貸おむつを身近に利用しやすくする配慮等が必要と考える。

文　献

1）日本衛生材料工業連合会：紙おむつの需要予測．紙おむつ News 48 (2004)

2）古松弥生，横田由美子，葩島富士江，尾崎淳子：おむつ着装時の被服気候と快適性．小児保健研究 51 (1): 82－88 (1994)

3）豊間和子：小児用紙おむつ内の尿量・湿度と不快感の関係．日本家政学会誌 45 (12): 1121－1136 (1994)

4）薩本弥生，山岸千穂，竹内正顯：乳幼児用おむつの使用実態と温熱的快適性の問題．日本繊維製品消費科学会 2006 年年次大会研究発表要旨：123－124 (2006)

5）植竹桃子，正地里江：紙おむつのつけ心地を理解させるための授業時実験法．日本家政学会第 58 回大会研究発表要旨集：176 (2006)

6）植竹桃子，正地里江：おむつの授業時手部装着実験の検討．東京家政学院大学紀要（自然科学・工学系）46: 31－40 (2006)

7）植竹桃子，正地里江：おむつ実装着実験を通して認識できるつけ心地．繊維製品消費科学 47 (12): 785－795 (2006)

8）高島秀樹：社会調査．pp. 156－157（明星大学出版部，東京，1997）

9）兵庫県立生活科学研究所：洗濯物の室内干し．繊維製品消費科学 47 (11): 681－685 (2006)

10）東京ガス㈱都市生活研究所：家事分担の意識と現状．pp. 5 (2002)

11）福田瑛子：家庭における洗濯の実態調査．和洋女子大学紀要（家政系編）43: 85－98 (2003)

12）㈳日本ダイアパー事業振興会：第 4 回貸おむつ生産量実態調査報告書．pp. 5 (2001)

13）㈳日本ダイアパー事業振興会：第 6 回貸おむつ生産量実態調査報告書．pp. 6－20 (2005)

（2007.3.20 受付　2007.5.28 受理）